

1996(平成8)年4月から2018(平成30)年3月まで、およそ20年間にわたり青森県史の編さん事業が行われた。筆者は1999(平成11)年から関与し、県内各地の役場をはじめ図書館や博物館を訪ね、公文書や行政資料の収集に携わってきた。自治体史の編さんには公的資料が欠かせないからである。他方、県内各地の由緒あ

る旧家や商家などを訪ね、多くの資料を調査し収集した。個人所蔵の資料は公的資料とは異なり、非常に興味深いものが多い。プライバシー問題などで利用が難しい場合もあるが、地域の歴史を知るためには必要不可欠なものである。古文书を中心に書簡や葉書、著書や雑誌、ノートやメモに至るまで多種多様なものが存在する。それら膨



深浦小学校への入学を記念して母と一緒に撮影
= 1966(昭和41)年・山本千鶴子さん提供

大な資料群の中に写真も含まれる。
写真は対象物を記録し、人びとの記憶に留める目的で撮影されることが多い。おおよそに分類すると、①業務記録として残す。②人びと(特に子ども)の姿を写す。③行事や催しを記録する。④旅先の記憶を留める。⑤趣味として撮りた

写真は大切な

歴史資料

中園 裕

(県民生活文化課
〈県史担当〉総括主幹)

める。以上の五つに分けられるだろう。もちろん一つの目的に限らず、複数にわたることも多い。
ここに1枚の写真がある。筆者がお世話になった方からの提供で、深浦小学校への入学に際し、母親と一緒に撮影したものである。

1966(昭和41)年春に撮影したものだそうだ。親にとって子どもは何よりも大切な存在である。卒業式、成人式、結婚式など、我が子の成長ぶりを写真に残すことは多いだろう。愛しい我が子の写真は、親にとって大切な記録であり宝物に違いない。

被写体となる子どもにとっても、子ども時代の写真は自分が生きてきた証拠となる。撮影された当時は気にも留めなかった子どもも時代の写真が、歳月の経過とともに、それを見ることで色々なことが思い出され、大切なものになっていく。まさに写真が歴史資料となる瞬間である。今回掲載した写真は親子の肖像写真であり、地域の歴史を語る資料として活用するには難しいものがある。しかし入学記念という視点でとらえれば、子どもの成長を喜ぶ親の気持ちや、親時の子どもたちの表情、親

子が着ている衣装の流行など、様々な事柄を読み取ることができる。個人的な写真であっても、同じような思いを体験した人びとの間で共感され、思いが共有されれば、その写真は立派な歴史資料になるのである。往事を知ることが決して後ろ向きの行為ではない。昔懐かしき写真を通じ、家族や仲間とともに語り合えば話に花が咲く。意外な事実を思い出して笑い合い、気持ちも若返る。高齢化社会を生き抜く上で、いにしえの写真は大いに役立つものなのである。

「断捨離」が話題に上がる。いずれもモノを捨てることの重要性を説いているが、大切な写真や文書類まで捨てないで欲しい。今後の自分にとって必要なものは最低限残すことが大切だ。本当の断捨離は、捨てるものと捨てないものを選別することにあると思う。

『東京と青森』637号
東京青森人会 2021年5月